

〔源氏物語關屋〕伊豫のすけといひしは、二院かくれさせ給て又のとしひたちになりてくだりしかば、かのは、きゝもいざなはれにけり、略○中又のとしの秋ぞ、ひたちはのぼりける、關いる日しも、この殿○源石山に御願はたしにまうで給けり、京よりかのきのかみなどいひしことも、むかへにきたる人々、この殿かくまうで給べしとつげ、れば、みちのほどさはがしかりなんものぞとて、まだあかつきよりいそぎけるを、女車おほく所せうゆるぎくるに日たけぬ、うちいでのほまくるほどに、殿はあはだ山こえ給ぬとて、御せんの人々みちもさりあへずきこみぬれば、せき山にみなおりゐて、こ、かしこの杉の玄たに、車どもかきおろし、木がくれにゐかしこまりてすぐし奉る、略○中九月つぎもりなれば、紅葉の色々こきませ、霜がれの草むらくをかしうみえわたるに、せきやよりざとはづれ出たる旅すがた共の色々のあをのつきく、玄きぬひ物く、りぞめのさまもさるかたにをかしうみゆ、御車はすだれおろし給て、かのむかしのこ君、いまは右衛門のすけなるをめしよせて、けふの御關むかへはえ思ひすて給はじなどの給、御こ、ろのうちいとあわれにおぼし出ることおほかれど、おほぞうにてかひなし、女も人えれずむかしのことわすれねば、とり返してものあはれなり、  
 ゆくとくとせきとめがたきなみだをやたえぬ玄水と人はみるらん、ええり給はじかしとおもふ、にいとかひなし、

〔今昔物語 二十六〕付陸奥守人見付金得富語第十四

今昔陸奥ノ守

ト云人有ケリ、亦其時ニト云者有ケリ、互ニ若カリケル時

ニ守心ヨリ外ニ頗ル妬シト思ヒ、置タル事ノ有ケルヲ、不知シテ守ニ付タリケルヲ、守艶ス  
 饗應シケレバ、喜ト思テ有ケルニ、陸奥ノ國ニハ、厩ノ別當ヲ以テ一顧ニ爲ニジ、京ニシテハ然様  
 ノ事共ヲモ未ダ定メテドモ、自然ラ出來ケル馬ノ事共ヲバ、此人ニ沙汰セサセナドシテ、厩ノ別